

平成 29 年度

グローバルプロジェクト実績報告書

国立大学法人 小樽商科大学

【本件に関するお問い合わせ先】  
小樽商科大学企画戦略課地域連携戦略係  
TEL: 0134-27-5234  
E-Mail: cocjimu@office.otaru-uc.ac.jp

## ●平成29年度 グローカルプロジェクト実績報告書 目次

・ 小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト	江頭 進	..... 1
・ 地域活性におけるふるさと納税の検討	二村 雅子	..... 2
・ 外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト	井上 典子	..... 3
・ 地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」	李 濟民	..... 4
・ 地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性	原口 和也	..... 5
・ 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化	小山田 健	..... 6
・ 北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化	高野 宏康	..... 7
・ 後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究	後藤 英之	..... 8
・ Lost in Translation? 倶知安・ニセコにおける増加する定住外国人と外国人観光客に対する「医療サービス」の課題とその克服 — 外国人患者のための「手引き」や共通「問診票」(日本語・英語)作成を含めた解決策提案も視野に入れて	佐々木 香織	..... 9
・ ローカル・ナショナル・グローバル企業群の経営分析	籾本 智之	..... 10

# 小樽まちづくりファンドのための支援者形成プロジェクト プロジェクト代表者: 江頭 進

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市に存在する歴史的建造物を保存・活用するためのクラウドファンディング（以下、CF）による資金調達システムをPRし、支援者層を形成するためのプロジェクトである。

小樽市内に存在する歴史的建造物は町の景観を構成し、また観光や教育の資源となっているという点で公共財的性格を持っている。その反面、それらの歴史的建造物は、個人所有のものが多く、莫大な維持管理費用はすべて所有者個人が負担しており、それに耐えきれず取り壊される建築物も少なくない。本プロジェクトは小樽市民の公共財である歴史的建造物の保存・活用の費用を広く市民に負担してもらうためのCFのPRを行うためのパンフレットを作成するものである。

他方で、歴史的建造物を保存・活用するためには莫大な費用が必要であり、小樽市民とその関係者だけでは十分な資金を用意できない。そこで小樽を訪れる国内外からの観光客に対して、本CFの意義を説明し、小樽ファンを形成し、固定的な寄付者層の形成をめざすものである。

## 2. 具体的な取組内容

パンフレットは、日本語6000部、英語1000部、中国語3000部を作成し、関係者への配布を開始した。

今後小樽の観光案内所等に置かれ、また観光時期に合わせて、駅や観光スポットで配布する予定である。また東京小樽会や関西小樽会へも送付し協力を依頼する予定である。

またクラウドファンディングサイトに関しては、信販会社との契約が成立した。



## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

クラウドファンディング本体は、様々なトラブルを乗り越えて、現在第一号案件の小樽公園通り教会の修復工事の準備を行っている。現在、2階までは上がれるが3階以上が閉鎖されているもの

を修復し、利用を可能とする予定である。(報告書作成時点では、教会側の会議で提案された詳細な計画を審議中である)。Webサイトは、<http://ega-o.org/cf/>



# 地域活性におけるふるさと納税の検討

## プロジェクト代表者: 二村 雅子

### 1. プロジェクトの目的・概要

#### 目的

最近、「ふるさと納税」という言葉がニュースや新聞で賑わっている。その理由の1つとして、寄附を受ける自治体が返礼品を渡す仕組みが納税者に受けていると考えられる。「ふるさと納税」の仕組みの是非も重要であるが、少なくとも農作物や海産物が豊富である北海道地域で恩恵を受けた地域は存在している。

北海道の地域活性化について、「ふるさと納税」を1つの素材として、学生自身が、問題について、自ら論理立てて考えることができるようになることを目指す。

#### 概要

以下3点について取り組んだ。

1. 従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。
2. ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。
3. 学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

(東川町は、政策的に優れた仕組みで成功している自治体として「ふるさと未来大賞」を受賞しており、調査対象として適切であると考えた。)

### 2. 具体的な取組内容

1. 従来の地方自治体の税収の仕組みとふるさと納税という寄附の仕組みの違いを理解する。

地方自治体の税収の仕組みについて、北海道財務局の方から参考文献を提示頂き、輪読を行った。ふるさと納税について、HPなどを参照して理解を深めた。

2. ふるさと納税が地域経済活性化にどのように役立つのかについて検討する。

ふるさと納税が地域経済活性化に役立つという大きな仮説の中で、どのようなことが要因になるのか、逆に問題点としてどのようなことが考えられるかを検討し、その上で質問項目を作成した。質問項目を作成した後、北海道財務局の方からアドバイスを受けた。

3. 学生とともに東川町へインタビュー調査を実施する。

2017年10月18日から19日に東川町を訪問した。19日の9時30分から長原淳副町長と面談をした後、12時過ぎまで、担当者の方へ質問を行った(企画総務課課長菊池伸氏、企画総務課写真文化首都創生室主事柳澤奨一郎氏、企画総務課地域おこし協力隊和田北斗氏)。

学部3年生という早い段階から、地域経済に関して検討をすること、現地へ行くための予定をたてること、実際に現地へ行き社会人の方へインタビューをすることで、学生の問題意識および動機づけを高めることができた。訪問後、「ふるさと納税が地域経済活性化に役立つ」という大きな仮説のもと調査にいったが、東川町は人口増加地域であるということも考慮すると、「町政が元々良いという素地のなかで、ふるさと納税は経済活性化の面で良いという要因の1つではないか」と仮説の再考を行い、東川町へ再度質問票を作成するなど学生達は能動的に行動できている。

### 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

これまでの成果を報告するため、小樽商科大学ゼミナール協議会によって毎年主催されている「インナーゼミナール大会」(2017年12月14日)に参加し、「東川町の町づくり」という題目で参加し、第2位となった。報告することで、学生達は内容の理解を深めた。また、やり通したことで自信を深めた。

東川町を題材としているが、小樽市のふるさと納税や市政運営について考えるヒントになる可能性がある。

# 外国人観光客に小樽の美味しいお魚を紹介するリーフレット作成プロジェクト

プロジェクト代表者: 井上 典子

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、小樽市の依頼により、本学学生の学習活動の一環として、小樽の美味しいお魚と魚料理、魚をテーマとしたイベントなどを外国人観光客にわかりやすく紹介する英語版リーフレットを作成するものである。

プロジェクトの目的として、①学生が小樽市の水産や観光担当職員、民間の関連事業者などと連携し、小樽市の古くからの主要産業である水産業への知識と理解を深めながら英語運用能力の向上を図ること。②小樽は海鮮料理が有名だが、これまで小樽のお魚にスポットを当てた外国人向けのリーフレットは作成された例がなく、食と産業の面から小樽観光の魅力について増加を続ける外国人観光客に発信することで消費効果を高めること。③学生は自分たちが作成したリーフレットが外国人観光客に使われ、小樽の観光振興に寄与することで大きな達成感を得ることができ、今後の学習意欲向上や就職活動にも良い影響を与えることが挙げられる。

## 2. 具体的な取組内容

2017年5月1日: 小樽市役所を訪問し、中野産業港湾部長から正式に本プロジェクトの依頼を受けるとともに、協力者と必要性、事業内容について打ち合わせを行った。

6月: 本プロジェクトに関心を持つ学生を募り、プロジェクトチームを編成し、リーダー・サブリーダーを決定するとともにプロジェクトの概要を周知した。

7月: 小樽市水産課が事務局を務める小樽のおさかな普及推進委員会の日本語チラシやホームページなどを参考にして大まかな構成を決定した。

8月～9月: 必要な現地調査を繰り返し行う。小樽運河および駅周辺にて外国人観光客に対しアンケート調査を行った。

10月: 調査内容などを整理し、協力者の監修を受けながらリーフレットに載せる内容とレイアウトの決定、日本語版の作成を開始した。同時に、小樽の魚を紹介する動画および観光客のマナーに関する英語の動画撮影を行った。

10月末: 協力者なども参加して中間発表。日本語版に対するフィードバックを頂く。

12月～: 日本語版を完成させ、英語への翻訳作業を開始。校正作業を行い、英語最終版を完成させた。平行して、動画の編集作業を行った。

2月13日: 完成品を印刷し、小樽市政記者クラブで発表を行った。完成品を市内外の観光案内所に置いてもらうとともに市外観光キャンペーンや物産展で活用してもらう予定。

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

小樽市では、全国的にもここだけという寿司屋通りがあることでも分かるように寿司など新鮮な海の幸を活かした料理や加工品が国内外からの観光客などに高い評価を得ている。しかしながら既存の観光ガイドなどは施設や景観が重視されており、海の幸について特化して紹介するツールは存在していなかった。そこで、小樽の魚にスポットを当て、小樽名産の海産物とその旬の時期のほか、料理や水産加工品、市場などについてさまざまな角度から紹介することで、より小樽観光を楽しむことができるような英語版リーフレットを作成したことで、外国人観光客の滞在時間と消費を高めることにより、経済効果を高めることが期待される。また、このリーフレットを市外での観光キャンペーンなどに使用することで、リピーターの来樽意欲の向上が期待される。学生においては、実際に小樽観光の最前線で求められている観光案内ツールを自らの手で創意工夫しながら作成したことで、単に学習効果だけではなく、職業訓練の意味でも大きな成果が期待される。さらにプロジェクト参加による社会人との交流、英語運用能力の向上などについても学生生活において得難い経験のチャンスを提供する機会となったと考える。



# 地域志向型学生教育プロジェクト「ものづくり目利き人材教育プログラム」

プロジェクト代表者：李 濟民

## 1. プロジェクトの目的・概要

近年のビジネスの現場では文系・理系の括りでは解消できない様々な課題が山積しています。「ものづくり目利き塾」は、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業として、小樽商科大学と室蘭工業大学が共催し、8月と9月の計4日間にわたって、文理の学生が垣根を超えて共に学び、将来、北海道経済・世界経済で活躍する「理系の現場・技術を知る文系人材」「文系の知見・考え方で発想できる理系人材」の育成を目指す取り組みです。

## 2. 具体的な取組内容

室蘭と小樽合計4日間で開催し、両大学あわせて18名の学生が参加し、学習を行いました。8月に開催された前半の2日間では、小樽商大生が室蘭工業大学ものづくり基盤センターを訪問、清水ゼミの学生らとともに、材料強度や鋳造といったものづくりの基礎と実習体験、企業見学(日本製鋼所 室蘭製作所)を行いました。9月の後半2日間では、室蘭工大生が小樽商科大学を訪問、市原ゼミの学生とともに、ものづくり企業の企業評価、グループワークによる事例研究、企業見学(北海製罐、光合金製作所)を行いました。

【開催地：室蘭】

第1回	【1日目】8月9日(水)	【2日目】8月10日(木)
午前	9:30~9:45 開講式	9:00~11:30 実習(鋳造(鉄))
	9:45~10:00 安全講習	
	10:00~10:30 講義(ものづくりの歴史)	
午後	10:40~12:40 講義(材料強度) 実習「ムーブワメガ」製作	11:30~12:00 まとめ
	12:40~13:40 講義(材料強度) 実習「ムーブワメガ」実験	12:00~13:00 工場見学 日本製鋼所室蘭製鉄所
休憩	12:40~13:40 昼休憩	12:00~13:00 昼休憩
午後	13:40~14:40 講義(材料強度) 実習「ムーブワメガ」実験	13:00~16:00
	15:00~17:00 実習(鋳造(鉄))	

【開催地：小樽】

第2回	【1日目】9月19日(火)	【2日目】9月20日(水)
午前	9:30~12:00 「ディスカージャと企業評価」 講義(決算書の読み方・ 財務分析の基礎) ケーススタディ 適切な情報開示の必要性・ 重要性について理解	9:00~13:30 事例研究(グループワメガ) 技術分析と財務諸表分析 企業価値の評価 ディスカージャ度の検証評価
	休憩	
午後	13:00~16:30 工場見学 ①北海製罐 ②光合金製作所	13:30~15:00 プレゼンテーション・質疑応答
		15:00~15:30 閉講式



### 北海道新聞による、小樽商科大学講義の報道



### 市原准教授の講義



### 光合金製作所見学



## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

両大学生への受講アンケートでも、講義で取り上げたテーマに対する興味・関心が高まったとの意見が多く、連携による学習効果は高かったと考えます。この取り組みの効果を検証するには複数年で実施する必要があります。

市原ゼミのWeb-Siteで情報発信をしていますのでご覧ください！

<http://cac-tus.wixsite.com/cactus>



# 地域情報発信ツールとしてのパズルアプリの可能性

プロジェクト代表者: 原口 和也

## 1. プロジェクトの目的・概要

情報の発信には様々な媒体が用いられるが、その1つとしてパズルアプリを用いることができないか、実証を通じて検討する。すなわち、**情報の種類によっては、パズルで遊ぶことを通じて効果的に伝達できないか**を問うのである。このプロジェクトでは題材として小樽および周辺地域の地名やスポット名にフォーカスし、地域のキーワードを散りばめた「ご当地スケルトンパズル」で遊べるアプリを開発し、リリースする。得られたフィードバックを元に、例えばどのような情報を、どういったパズルで発信するのが効果的なのかなど、今後の展開に必要な知見を取りまとめる。

## 2. 具体的な取組内容

上で述べたような小樽地域に関するご当地アプリの開発と、当該アプリを用いた情報発信の効果を測定するためのアンケート調査を実施した。

**【アプリ開発】**ご当地スケルトンパズルで遊ぶことのできるアプリ「オタルトンパズル」を開発した。スケルトンパズルとは、白黒に塗られた盤面とキーワードのリストが解答者に与えられ、すべてのキーワードをスロット(縦もしくは横に連なる白マス)の極大区間に割り当てていくことを問うパズルである。このアプリの最大の特徴は、小樽地域のキーワードを用いたスケルトンパズルで遊べることにある(全11問)。キーワードの由来に関する簡単な説明を見ることができ、地域学習への活用も期待される。なおパズルインスタンスの生成には、これまでの研究を通じて開発してきた最適化プログラムを用いた。

さらにもう1つ、ゼミ指導を通じて、小樽に関するクイズアプリ「たるあるき」を学生に開発してもらった。このアプリには小樽に関する豆知識を問うクイズ10問と、現地(小樽市内)に行かなければ正解がわからないような画像を用いたクイズ10問が収められており、いずれも学生がフィールドワークを通じて考案した。

両アプリとも、Apple社のApp Store、もしくはGoogle社のGoogle Playから無償でダウンロード可能である。また風景画像の使用など、小樽観光協会の協力を得ている。

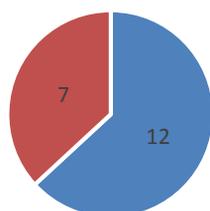
**【アンケート調査】**2017年12月17日(日)、「小樽のご当地アプリで遊んで景品をもらおう」という景品交換イベントを実施し、来場者に対してアンケートを依頼した。このイベントは、アプリ内のパズルやクイズを解いて得られるクーポンと、景品(小樽の土産物、玩具、飴など)を交換するというものである。

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

参加者25名のうち、19名からアンケートの回答が得られた。結果の一部を以下に示す。**地域のことを学ぶ上で、上記のようなアプリを活用することに一定の効果がある**ことが、左側の円グラフから読み取れる。さらに右側のグラフから、**実施したイベントに対する高い評価**が読み取れる。

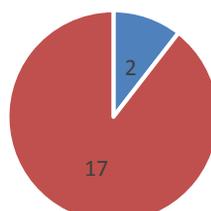
スケルトンパズルのように単語を用いたパズルのアプリや、地域のことそのものを問うパズルアプリが、地域学習のツールとして有用であることを実証的に示すことができた。また、当初はアンケート調査を目的として行ったイベント自体が予想以上の盛り上がりを見せ、このようなイベントが地域振興の役割を果たしうることも示すことができた。

アプリで遊んでみて、小樽や周辺地域について何か学ぶことができましたか？



■ 少しあった  
■ 大いにあった

このイベントのような、アプリを用いた地域振興イベントをどう思いますか？



■ 少し面白い  
■ とても面白い

※アンケートの問いに対する回答は5段階評価。上記グラフの赤が最高評価、青が次点。

# 小樽・後志におけるヒューマンストーリーの発掘と地域資源化

プロジェクト代表者：小山田 健 プロジェクトリーダー：高野 宏康

## 1. プロジェクトの目的・概要

### ●プロジェクトの目的

小樽・後志地域では、近代以降、多様な歴史文化が展開していますが、その担い手たちが高齢化などにより年々減少し、記憶の風化が進んでいます。本プロジェクトの目的は、小樽・後志地域の人たちのヒューマンストーリーを調査・記録し、地域資源としての活用を推進することです。

## 2. 具体的な取組内容

### ●地域情報の学習および取材方法・記事のまとめ方の修得(採択後～平成29年7月)

授業(総合科目「グローバルイズムと地域経済」)内で、小樽・後志地域の歴史文化および社会経済の特徴、取材方法、記事のまとめ方についての講義および、小樽市内バスツアー(5/27)によるフィールドワークにより、地域社会に対する理解を深め、取材と記事作成方法を習得しました。

### ●インタビュー実施と記事作成(平成29年6月～7月)

小樽のまちや歴史に詳しい市内在住の23人に学生が各3～4名のチームでインタビューを実施。約2千字の記事を作成しました。昨年度よりインタビュー先と密接にやり取りを行い、文字数を500字増加するなど記事作成方法の改善を行い、記事のクオリティを向上させました。

### ●ゲスト講師とのトーク&ディスカッション

ゲスト講師(渡邊英彦氏・富士宮焼そば学会会長)を招聘し、食を通じた地域活性化についての講演および学生とのトーク&ディスカッションを実施しました(5/31)。

### ●インタビュー先と学生の公開座談会(平成29年11月14日、会場：おたる千成)

手宮地区のインタビュー先等5名と学生による公開座談会を実施し、地元住民95名が参加しました(「小樽のひとに学ぶ～手宮の歴史文化とまちづくり～」)

### ●COCシンポジウムでの成果報告(平成30年2月20日、会場：小樽市民センター)

本プロジェクトに携わった学生2名がプロジェクトの内容と成果について報告しました。

### ●インタビューと座談会をまとめた冊子発行(平成30年3月、1000部)

インタビュー記事と公開座談会を収録した冊子を発行しました。小樽市内各所で配布し、市立小樽図書館等、小樽観光協会などに設置しました。

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

学生は授業での学習により地域への理解を深め、記事作成、座談会参加等により情報発信力を高めました。インタビュー集を発行、公開座談会開催により、小樽の人的資源について、市民・観光客へ情報発信し、着地型・交流型観光コンテンツなど地域資源としての活用を推進しました。



取材の様子(株式会社樽石にて)



手宮での公開座談会(11/14)



# 北海道における北前船の歴史的価値の観光資源化

プロジェクト代表者：高野 宏康

## 1. プロジェクトの目的・概要

### ●プロジェクトの目的

北海道の発展に重要な役割を果たした北前船の調査研究を通じて、その歴史的価値の地域観光資源化を推進し、小樽・後志と道南、札幌圏をつなぐ新たな広域連携・観光ルート開発を目指します。本年度は特に、①道内・択捉島、北陸の調査と、②日本遺産認定自治体との連携を推進しました。

## 2. 具体的な取組内容

### ●調査研究（平成29年5月～平成30年3月）

#### ①小樽倉庫の創設者・西谷家に関する新出資料を多数発見

旧西谷邸（石川県加賀市橋立町）の未調査資料を加賀市と連携して調査を実施しました。（西谷海運の社史等を含む小樽および道内での西谷家の事業関連資料数千点以上）

#### ②道内（後志・札幌・石狩・択捉島）、択捉島で北前船関連文化財の調査を実施

ヨイチ場所産のイナウ、九谷焼（小樽・後志・札幌・石狩）、船絵馬（厚田）、軟石（札幌・辻石材工業）、北洋漁業関連（函館、択捉島）等、新たな知見が得られました。

### ●情報発信・情報提供による地域観光資源化

#### ①日本遺産事業に協力（北前船日本遺産登録推進協議会、日本遺産追加認定申請

自治体：小樽市・石狩市・富山市・大阪市など、日本遺産認定自治体：函館市・加賀市・小松市など）。小樽市の追加認定申請に、本研究プロジェクトの調査研究成果、取組みが実績として位置づけられました。日本遺産認定記念講演会に協力・出演しました。

#### ②HBC北前船こども調査団事業に協力 小樽でのワークショップ、ガイドツアー、

全国の北前船寄港地（6自治体）が小樽に集まって開催した北前船こどもサミット、まっぷる特別編集「北前船こども調査団」に監修等で全面的に協力しました。

#### ③北前船と北海道について各種メディアに論考を寄稿

（小樽商工会議所会報、BYWAY後志、小樽チャンネルMagazineなど）

#### ④各種講演会、シンポジウム、ラジオ、新聞等による情報発信（20件） 花川北中学校で

は出前授業を実施し地域教育に貢献しました。COCシンポジウムで報告しました（2/20）。



北前船と銀行



日本遺産認定記念講演会



まっぷる特別編集版



上：西谷家調査(2018.11)  
左：北國新聞の記事(2018.2.27)

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

本年度は、日本遺産事業に協力することで、道内・北陸などの認定自治体と連携して北前船の観光資源化を推進することができました。また、北前船関連の全国学会、各地の地域振興事業などに情報提供を行い、小中学校、本学の地域志向型教育プログラムに成果を還元することで、**調査研究・観光資源化・教育のサイクルを確立**できました。

# 後志地域における広域観光形成を前提とした、観光動態の可視化に関する調査・研究

プロジェクト代表者：後藤 英之

## 1. プロジェクトの目的・概要

本プロジェクトは、後志地域における観光客の動態を可視化し、新たな観光資源の発掘と観光戦略の検討を行うことを目的としています。具体的には、小樽市及び余市町、倶知安町、ニセコ町を対象とし、観光客の動態を把握、新たな観光資源の開発を行う。小樽市や余市町、ニセコ地域が連携し、観光地としてのブランドアップを図ることで、小樽・余市・ニセコ地域との広域観光圏形成が可能となり、地域経済活性化につながるものと考えております。

## 2. 具体的な取組内容

### 【本プロジェクトのスキーム】

本学と国立情報学研究所(NII)との共同プロジェクトとして立上げを行い、後志管内町村も参画しました。具体的には、NIIの開発した「wifiビッグデータ動態分析プラットフォーム」を活用し、実験的に小樽市内のインバウンド観光客の観光動態分析を実施しました。今後、小樽での分析を後志地域での動態分析に拡大し、広域観光実現に向けたプロジェクト活動を行いたいと考えております。



ビッグデータ動態分析プラットフォーム  
「出所：NII曾根原研究室」

プロジェクト体制

### 小樽市における外国人観光客の動態(1日)



【午前中】  
小樽駅⇔運河周辺への人流  
小樽駅⇒メルヘン交差点への人流

【午後】  
小樽駅⇔運河周辺への人流↓  
小樽駅⇒メルヘン交差点への人流↑  
小樽駅⇒朝里川温泉への人流

【午後～夕方】  
小樽駅⇒朝里川温泉へ団体客の人流を確認  
※朝里川温泉を核とした、観光造成の必要性

## 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

今年度のプロジェクト成果は、連携機関との勉強会などを通じ地域政策に活用して頂く予定です。

## プロジェクト代表者: 佐々木 香織

### 1. プロジェクトの目的・概要

俱知安・ニセコ地域では外国人居住者と観光客が急増しており、その対応が喫緊の課題である。現下、教育や行政サービスは適応し始めているが、医療サービスは未知数だ。マイノリティを抱える地域における医療は、言語の差異ばかりでなく、身体・疾病観や医療制度といった文化・社会的差異にも起因し、いわゆる *lost in translation* が起こりがちである。その結果、診察や治療が滞ったり、患者が不必要な不安に陥ったりしやすい。その為、ロンドンなどの国際都市では、その対策を始めて久しい。本プロジェクトは、ゼミ生を中心とし、この問題にまつわる『地域の課題』を社会調査により追究し、その『解決策』の提案を行うことを目的とする。具体的には、外国人と日本人医師・看護師・薬剤師・薬剤販売従事者などとの間で *lost in translation* を防ぐような日本語と英語での「手引き」作成といった実践的解決策の提案も視野に入れる。俱知安・ニセコ地区の日本人関係者への聞き取り調査と同地域を訪れる外国人観光客へのアンケート調査を実施し、より現場の声を反映した解決策を模索する。本プロジェクトを通じ、①『地域貢献』が成され、更には、②参加学生が、a) 地域の課題と社会調査を習熟し、b) 地域の課題に協働して取り組み、c) 英語の活用もできるという、『グローバル人材』へ育っていくことが期待される。

### 2. 具体的な取組内容

まず、関係者に対して現地で「聞き取り調査」を3回(9月,10月,1月)実施した。次に外国人観光客に対して「アンケート調査」(1月)を行い、情報収集と仮説の検証に役立てた。最後に調査結果をベースに、外国人へ必要な情報を提供すべく、冊子作成に取り組んだ。

第一回調査では、外国人が医療サービスを受ける際に抱える問題点の洗い出しがなされた。特に重要な点としては①外国人がニセコ地域におけるドラッグストアも医療機関もよく把握できていない;②施設を知ったとしても、外国人に必要な情報(言語、支払い方法、開業時間)の入手が難しい;③ニセコ地域の医薬関連施設の相互連携と情報不足により、外国人が施設をたらい回しにされている;という三点が挙げられる。

第二回調査では、外国人の情報不足とたらい回しの現状の原因を追究した。判明した要因は④日本の医薬品販売形態(薬剤師の配置など)と外国との差異による期待値のギャップ、⑤医療制度の違いに起因した、日本の医療サービス選択(病院、各専門診療所、鍼灸など)への戸惑い、⑥日本の制度を当然視した情報提供と説明による、*lost in translation*;であった。

第三回調査は、実際に大量の外国人が訪れる中、ニセコ地域の外国人に対する医療サービスの現状把握に努めた。すなわち、⑦各病院、調剤薬局、ドラッグストア等の施設における外国人への対応を聞き取り調査し、⑧外国人観光客の日本の医療サービスに対する知識、体験、期待などアンケート調査をした。これらの調査により、外国人が必要とする情報を確認した。

1-3月は、調査結果をもとに市町村向けの調査報告書、ならびに外国人向けのニセコ地区の医療手引き・マップを作製した。「手引き・マップ」の表面では *lost in translation* を引き起こす要因となる、我われが当然視してしまっている日本の医療サービスについて、彼らとの違いを認識しながら、ピクトグラム(絵文字アイコン)や表を含め、説明するものとした。裏面は、地図で医療サービス施設の位置関係を示しながら、具体的にその施設の利用にあたって外国人が必要としている情報(支払方法、薬剤師の有無など)を掲載した。

### 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

本プロジェクトの成果は、大きく四つ挙げられる。一つは、参加学生が地域の課題に対して、調査と分析を行うスキルをつけたことである。第二に、全ての学生が外国人への対面アンケートを実施したことにより、英語の活用を含めた外国人との交流を行う技能を付け始めた点である。第三に、地域の課題に対して「解決策」として、英語による冊子・マップを作成し、各方面に納入し、地域貢献をしたことである。第四に、本プロジェクトの報告書を、俱知安・ニセコ町役場へ作成・提出することにより、調査結果を共有するという地域への還元を行う予定である。

### 1. プロジェクトの目的・概要

北海道をベースにしている企業は同一の業種で全国を対象にしている企業, グローバルに活躍している企業に比べてどのような特徴があるのか。特に成長性, 収益性および安全性においていかなる違いがあるのかを分析する。従来, ローカル企業はターゲット市場を成長に応じてリージョナル, ナショナルと広めていく中で競合との差別化を図る一方で, 規模の経済を獲得してコストリーダー的な側面を持つようになる。こうした企業の成長・競争はグローバルレベルにまで急速に拡大している。そうした現在, 生存しているローカル企業はナショナル企業やグローバル企業とローカル市場では競争しながらも何らかの優位性を維持しながら持続しているのである。本プロジェクトでは同一業種に属するローカル企業, ナショナル企業, グローバル企業として1社ずつ選定し, 3業種の企業群を経営分析する。

### 2. 具体的な取組内容

今年度後期のゼミ活動として, 本プロジェクトを遂行した。

まず, ゼミ生14名を分析を希望する業種会社名を募り, 3グループに分類した。スーパーストア業界, ドラッグストア業界, 航空業界である。スーパーストア業界では, アークス, ダイイチ, イオン北海道, イオン, セブンアンドアイ, ウォルマートの6社を分析することにした。ドラッグストア業界では, サツドラ, サンドラッグ, ツルハ, ウエルシア, マツキヨ, ウォルグリーンの6社を分析することにした。航空業界では, エアドウ, スターフライヤー, 全日空, JAL, ユナイテッドの5社を分析することにした。

分析手法としては, まず各社5年分の連結財務データを入手し, 財務諸表分析を行った。さらに, アニュアルレポート, 有価証券報告書, 雑誌・新聞記事に基づいて, 市場分析と組織分析を行って, 問題点を抽出し, 解決策を立案した。

これらの研究は日本大学商学部で開催されるアカウンティングコンペティション2017でグループごとに発表し, また, 個人別にケースレポートを執筆した。

### 3. プロジェクトの成果及び地域への還元

プロジェクトの成果はアカウンティングコンペティション2017で発表するとともに個人別のケースレポートを執筆したが, ケースレポートはPDFで本学WEBサイトを通じて公表する。